

審査員賞

(福岡県直方市)

山本 千鶴子

「潔く逝ったあなたへ」

電話が終わって、寝ているあなたを覗いたら、様子が変わりました。「おとうさん!」「おとうさん!」と呼び、あなたが亡くなっていることがわかったとき「エエーン」「エエーン」と泣きました。

なかなか病院へ行かなかったあなたが、やっと重い腰を上げ診察を受けた時は手遅れでした。「末期の肝臓癌ですね」と先生に告げられた時、あなたは「ありがとうございます」と明るく冷静でした。きつと尋常でない体の状態に、もう覚悟をしていたのですね。

ビールの好きなあなたは、毎日七本、しかも朝から飲んでいました。

私がいくら注意しても「好きなものを飲んで死ねれば本望」と取り合ってくれませんでした。私は「病気になっても知らないから!」と云っていました。

在宅介護に入つてのあなたの体は階段式に悪くなって行きました。好きなビールも美味しくないと云い、食べ物全部吐きました。そして、たった一か月で呆気なく逝ってしまいました。なぜそんなに早く逝ったのですか? 楽しみがなくなり、これからの苦しい闘病生活などしたくないから? あるいは遠い先生の往診が楽になるようにしてあげたかったの? まさか、私が看病を今は機嫌よくしているけれど、きつと音を上げるに違いないと思つたからですか? 私は楽しかったのに、だつてあなたは優しくなり、優等生でしたもの。あなたとの結婚生活の中で、一番充実した幸せなひと時だった気がします。元気だった頃は半分以上喧嘩をしていましたもの。

亡くなる前日、あなたは私を見てニコツと笑いましたね、あの笑顔忘れません。また、「お前が極楽に行けるように俺が守つてやる」と云つてくれた言葉は私の宝物になりました。だから、私がそちらへ行つた時、「夫の病気に気が付かない鈍感な悪妻だった」なんて云わないで、きつと迎えてくださいね。